

令和7年度 山梨県立甲府南高等学校学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針 将来、日本や国際社会の様々な分野で活躍し、社会の発展に貢献できる人材の育成を図る。

山梨県立甲府南高等学校長 篠原 健

本年度の重点目標	1 活用力や探究力を高める授業を展開し、確かな学力の定着を図る。
	2 様々な体験を通じて、他者を思いやり、社会の絆を深める「しなやかな心」を育てる。
	3 体育活動・文化活動を積極的に推進し、心身共に健全な生徒を育てる。
	4 生徒の個性を活かし、自己の生き方・在り方を考えさせる進路指導を積極的に行う。
	5 スーパーサイエンスハイスクールにおける主体的・協働的な探究活動を深め、課題解決能力を育てる。

達成度	A ほぼ達成できた。(8割以上)
	B 概ね達成できた。(6割以上)
	C 不十分である。(4割以上)
	D 達成できなかった。(4割以下)

評価	4 良くできている。
	3 できている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

自己評価			年度末評価(2月25日現在)		
本年度の重点目標			自己評価結果		
番号	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	各教科における見方・考え方を働かせ、探究的な活動を通して、活用できる知識・技能や、複雑な事象・内容を解決するための思考力・判断力を育てる	授業目標を明確にした指導と評価の一体化を実現する授業により、生徒の思考力・判断力・表現力を養う	授業観察 小テスト 授業アンケート	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業改善や指導法および評価の研究、研修の場として、教科会議をさらに活発なものとするよう促していく。また、相互授業参観を活性化し、学習課題のあり方について検証し、授業改善につなげていく。</li> <li>・各教科において主体的で協働的な学習活動を推進するとともに、教科横断的な視点で課題発見、課題解決が図られるよう教科間の繋がりを強めていく。</li> <li>・ICTを効果的に活用し、生徒一人ひとりが成果をまとめたり、発表する場面をより多く設定していくとともに、定期試験の作問研究など、記述力を試したり、高めていく工夫を検証していく。</li> <li>・一人一台端末により、ICT機器を積極的に活用することで、発展的で深い学びとなる学習活動の研究をしていく。</li> </ul>
		生徒の主体的で協働的な学びにより、探究力や課題解決能力を養う	学習の記録表 課題の状況把握		
		自分の考えを整理する機会や発表する機会を設定し、言語活動の充実を図る	定期試験への記述問題、発表における総合評価、日常の授業での評価の充実		
2	様々な体験を通じて、他者を思いやり、社会の絆を深める「しなやかな心」を育てる	ボランティア精神の啓蒙に努め、主体的なボランティア活動を推進する	ボランティア1000回運動 環境委員会活動 インター外委員会活動	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報発信に努めボランティア精神を啓発し、潜在性を引き出して社会貢献の機会を増やしたい。</li> <li>・、あいさつや身だしなみについては生徒のマナーが向上している一方で、服装や遅刻指導の点で、職員の共通理解がより必要であることが自己評価結果からわかった。安心安全な学校を目指し、職員の意識共有の機会を年間を通じて持てるよう工夫する。</li> <li>・LHR計画が有効に実践されており、知徳体バランスの取れた生徒の育成が図られているという点で、昨年と比較して大きな改善がみられた。</li> <li>・年間170時間のスクールカウンセリングを実施し、生徒と保護者、教職員への相談体制の充実を図った。また学年保健連絡会を5回実施するとともに、スクールカウンセラーや教育センターの担当者からアドバイスを受けながら、様々な問題を抱えた生徒について、個々の事案を共有し、状況の改善、解決を図る一助とした。その他に2年生の車いす使用生徒について、学年を中心に関係各所と連携、情報共有しながら必要なサポートを行った。</li> </ul>
		通学時マナーアップ運動と運動した安全登校や挨拶・身だしなみの指導を展開する	運動者数の統計調査 事故違反者数の統計調査		
		道徳教育を推進し、しなやかな心を持つ、人間として調和のとれた生徒の育成に努める	LHRでの活動 各種行事等の実践事例		
3	体育活動・文化活動を積極的に推進し、心身共に健全な生徒を育てる	関係機関との連携やスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用により、生徒のメンタル面のケアと教育相談の充実を図る	学年保健連絡会実施	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部活動加入率は男女ともに100%を超え、積極的な活動が行われている。高校総体では男子総合5位、女子総合6位と男女ともに入賞し健闘した。陸上競技部をはじめ体育局・文化局とともに全国(関東)大会出場を果たしている。</li> <li>・生徒が自主的・主体的に学校行事を企画運営し、一般公開による学園祭などを通して創造性や公共心が育成された。</li> <li>・全員参加で楽しめる体育祭や球技大会を、生徒主体により計画実施している。</li> <li>・県のガイドラインに従って休業日を設け、計画的な部活動運営を行った。</li> </ul>
		部活動を計画的・効果的に進め、学校の活性化と生徒の心身の健全な育成に努める	各種大会の結果 部活動への参加率		
		文化的・教養的行事等を通じて生徒の豊かな感性の育成に努める	外部参加者へのアンケート調査		
4	生徒の個性を活かし、自己の在り方生き方を考えさせる進路指導を積極的に行う	体育的行事等を通じてスポーツに親しませ、体力向上に努める	新体力テストの実施 生徒アンケートの実施	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土曜日や平日放課後の課外・学習会については多くの教員が大変前向きに実施してくれ、生徒にとって有効な学習の機会となった。各教科に状況聞き取り、応用力養成等のために現状通りの実施を望む声が多かった。</li> <li>・2年生を対象として実施した難関大学研究会は、本校教員を講師として、公立2次試験の問題に挑戦しながら生徒の意欲向上を図り、今後の学習への指針を示すこと共に、教員の研修の機会としても機能することを目指して行った。本校では2次試験の比率が高い大学を受験する生徒が多く、教員による指導の必要性も高い。この研究会に向けては、教科間で意見や情報の交換や、昨年担当した教員からの引継ぎなどを行いながら準備を進められた点も有意義であった。</li> </ul>
		月2回のきずなの日を完全実施する中で、計画的に部休日を設ける	活動計画書・活動実績書		
		ホームルームや総合的な探究の時間を中心に、体系的プログラムによるキャリア教育を推進する	発表における自己評価 及び相互評価を発表する機会の設定		
5	スーパーサイエンスハイスクールの活動において、各生徒の研究テーマをもとに、主体的・協働的な探究活動を行い、県内の高校へ成果を発信する	生徒の進路希望をふまえ、ガイダンス機会を設け、個別最適な学びを実現する学習や個別指導・課外を行う	課外の実施回数 生徒アンケートの実施	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土曜日や平日放課後の課外・学習会には負担と感じる生徒もいるが、進歩の確保や応用力養成、学習習慣定着などに必要との各教科等からの判断により実施を継続し、多くの教職員の苦心と協力により一定の成果をあげてきたものである。生徒が意義を感じられるのはその時とは限らない面もあろう。現段階では、負担はあっても意義もあると生徒が思えるような働きかけや目的の明確化を今以上にに行いながら継続していきたい。同時に、教員数の減少に伴い、教員の配置等にも配慮が必要である。</li> <li>・各種講演会については、文系理系や興味関心、進路希望に関わらず視野を広げ、思考を深める機会となるよう運用していきたい。文理融合、文理の枠を越えた学びが話題になる現在、希望でない分野の学びにも価値を見出せる人材育成を目指したい。</li> </ul>
		キャリア形成を主体的に行えるよう、自己の進路と社会の諸問題を結びつけて考えさせる	講演会や講話の実施 小論文指導		
		学校設定科目「フロンティア探究」を通して課題研究に全校で取り組み、学びに向かう力をつける。成果の公開・普及を行う	研究発表会 指導者連絡会議		
4	研究テーマが多様で興味深く、生徒の探究意欲が十分に表れている。他校も交えたSSHの研究発表は、生徒に新たな視点や刺激を与え機会となっており、非常に有意義である。1・2年生の課題研究の成果からは、多様な分野に主体的に取り組む姿勢が確認でき、学習の深化が図られていることがわかる。また、周辺に県内高校を巻き込んだ活動を展開している点からも、推進校としての役割を適切に果たしていると評価できる。研究成果の発信については、マスコミ等の媒体を積極的に活用する余地がある。発表の場に大手企業の営業部門・開発部門の担当者も参加し、専門的な視点からのフィードバックを受けることは、生徒にとって大きな成長につながるだけでなく、広報効果も高い。こうした外部連携を戦略的に進めることが、学校ブランドの強化にも寄与するであろう。自ら課題を見いだした、研究成果を積極的に発信する姿勢は極めて重要であり、他校への成果発信を含め、今後も継続していくべき取り組みである。貴校の特色であるスーパーサイエンスハイスクールの活動は、県内の高校のみならず、中学校にも積極的に紹介し、理数・探究教育の裾野を広げたいことが望ましい。海外機関や大学、企業などとの連携を一層推進し、国際的なネットワークに触れる学習環境を整えることで、世界で活躍できる人材の育成を期待する。				
		高大接続プログラムを開発し、ポートフォリオやルーブリックの研究を行う	生徒・教員アンケート ポートフォリオ ルーブリック		
		サイエンスイングリッシュや研修旅行を通じて、実践的英語力を育成する	サイエンスイングリッシュ 連携校との交流		

学校関係者評価	
実施日(令和8年3月1日)	
評価	意見・要望等
4	ICTを効果的に活用した授業が積極的に展開されており、非常に質の高い取組でもって評価できる。今後は、課題や家庭学習などにおいて学習姿勢が受け身になりやすい生徒に対して、より適切に働きかけられる仕組みを整えることで、学習意欲の一層の向上が期待される。SSH関連教科をはじめ、探究活動を通じて学術的な学びが深化している点は、本校の顕著な特色である。教科横断型授業の実践は極めて意義深く、継続すべき取り組みである。その一方で、教員の負担が増大しないよう、むしろ負担軽減につながる組織体制や運営の工夫が求められる。相互授業参観が効果的に実施されている点も高く評価できる。生徒による授業評価の導入など、多面的な視点を取り入れることは、授業改善の新たな契機となり得る。今回の調査結果では、いずれの項目も高い評価が示されており、教員が「生徒にどのような資質・能力を育成するか」について共通理解をもち、日常的に深い教材研究を行っていることが確認できる。ただし、同様の質問を毎年継続する場合、新たな取組を引き出すことが難しくなる可能性があるため、評価の観点や視点をより明確化し、調査の意義を再整理する必要がある。
3	生徒の多くが自発的に挨拶できており、極めて素晴らしい。学校の基本的な生活習慣がしっかりと身につけていることの実績である。一方で、安全登校指導、服装、遅刻指導については、教員によって対応に差が見られる印象がある。生徒が混乱しないよう、共通理解と指導方針の統一を図る必要がある。地域社会との連携行事を工夫しながら実施している点は高く評価できる。ボランティア活動を通じて生徒が「支援する側」を経験できていることも意義深い。しかし、本項目の真の達成には、多様な地域住民との関わりの中で、「支援する側」の「支援される側」という立場を超え、対等な協働経験が不可欠であると考えられる。教員の人的余裕が十分でない現状では、これら多岐にわたる内容を授業や学校活動に完全に組み込むことは極めて困難である。したがって、教員の物理的・時間的な余裕を確保する取り組みが、今後さらに必要である。また、地域社会との連携を深化させるために、引き続きボランティア活動の推進と交流の機会創出を期待する。「安全登校指導」については、特に自転車通学者のヘルメット着用を、生徒一人ひとりが当事者意識をもって理解できるように、継続的な指導が望まれる。南高では、学習や部活動のみならず、豊かな心の育成に向けて、人として大切にすべきことを丁寧に指導している姿が確認できる。組織の規模が大きくなるほど「共通理解」と「情報共有」は難しくなるため、定期的な確認や共有の場を設けるなど、継続的な工夫が求められる。
4	行事を通じて集団としてのまとまりや協働する姿勢が育まれており、学校文化の成熟が感じられる。部活動については、体育部・文化部ともに好成績を収めている部が多く、その成果は顧問の指導力や熱意に支えられている部分も大きいと考えられる。県内各種大会で入賞が示すように、学習と部活動を高い水準で両立させている生徒が多く育っている点は評価に値する。また、ボランティア活動、安全指導、道徳教育、心身の健康管理などの領域については、今後さらに地域社会、保護者、行政との連携を強化し、教員以外の大人(特に地域の年配者など)の協力を得ながら取り組みを体系化していくことが望ましい。学校が単独で担うには負担が大きい領域であるからこそ、地域ぐるみの協力が不可欠である。貴校は多方面において充実した学校活動を展開している。今後も学習面のみならず、部活動、学校行事、体育的行事などのバランスを図り、双方の多面的な成長を支える教育環境を維持・向上してほしい。体育的活動と文化的活動の両方に力を注ぎ、年間を通じて多くの生徒が表彰されている点も誇るべき成果である。進学実績だけでなく、多様な分野で活躍する生徒が活躍していることを期待する。
4	受験対策における個別指導(面接・小論文等)が極めてきめ細かく丁寧に行われており、生徒の成長に大きく寄与している点は高く評価できる。一方で、この手厚い指導が教員の負担増につながっている可能性は否定できず、持続可能な体制づくりが今後の課題である。3年生の進学状況からは、3年間を通じた継続的な進路指導が徹底されており、多くの生徒が当初の進路希望を着実に実現していることがうかがえる。しかし、進路志望の実現のみならず、「自己の進路と社会課題を結びつけて考えられるか」という視点を客観的に評価する仕組みを導入することも必要であると考えられる。社会と自己を関連づけ思考する力は、今後一層求められる資質である。甲府南高校の将来を見据えた場合、個別指導のさらなる充実が不可欠である。生徒が将来の選択肢を十分に理解し、自らの進路を主体的に設計していくためには、継続的な講演会や進路関連プログラムを通して、外部の知見に触れる機会を積極的に提供し、生徒のモチベーション向上を図ることが望ましい。